“テレビアニメ”の源流を探る
～連続テレビ漫画『かっぱ川太郎』～

メディア研究部　高橋浩一郎

はじめに

2017年に日本アニメは誕生100年を迎えた[1)]。1963年の国産初のテレビアニメシリーズ『鉄腕アトム』[2)]以降，それまで映画の世界のものだった“アニメーション”に，テレビも大きく関わることになり，2016年には年間で356タイトルのシリーズアニメがテレビ放送される状況にある[3)]。アニメーションの歴史については多くの論考があるため，ここでは触れない。主要な文献に関しては後記するので，そちらを参照してほしい。

本稿ではテレビアニメ開始前に試みられた，“アニメーション”とは言えないが，“アニメーションに近い”いくつかの番組，とりわけこれまであまり語られることのなかった連続テレビ漫画『かっぱ川太郎』を通して，“テレビアニメ”という，今や日本の映像文化を代表するジャンルが確立する前の源流の1つを探ってみたい。

連続テレビ漫画『かっぱ川太郎』とは

『かっぱ川太郎』は，河童（かっぱ）の漫画家として知られる清水崑（こん）の原作で，1951年に小学生朝日新聞に連載された漫画をテレビ番組にしたものである。NHKで1954年2月4日から1956年7月31日にかけて全861回放送された。放送尺は1分と短いものの，録画放送がなかった当時，夜7時台にほぼ毎日放送され[4)]，1955年には朝日新聞社の企画で映画化もされており[5)]，当時は一定の人気があった作品と考えられる。ただ放送された映像は残されておらず，直接確認することはできない。

清水崑の故郷である長崎市に清水崑展示館があり，手がかりを求めて取材してみると『川太郎』の原画が残されていることが分かった。確認してみたところ，『川太郎』の原画はA4サイズで1,000点以上あった。原画は，1枚に4コマが描かれたものと，6コマが描かれたもの，そして1枚に1コマが描かれた4枚1組のものと，3種類が混在していた。4枚1組のものがテレビ撮影用に描かれた原画ではないかと思われる。

『かっぱ川太郎』の原画（長崎市 中の茶屋・清水崑展示館所蔵）

作家・辻真先氏が語る放送現場

『川太郎』の放送現場に立ち会っていた人がいる。日本のテレビアニメ草創期から脚本家として活躍してきた作家の辻真先（まさき）氏（86）である[6)]。辻氏は1954年から1962年に退職するまで7年あまり，芸能局ディレクターとしてNHKに勤務していた。入局直後の1年間，制作進行を担当してさまざまな番組の放送に立ち会う中で『川太郎』にも関わったことがあるという（辻氏によると，当時の制作進行は，テレビの映像に関わるすべての小物や美術の出し入れを担当する役割だった）。その年にテレビ部門に採用された職員はわずか6人。その人数で毎日のテレビスタジオの進行を回していたという。

当時，テレビスタジオはまだ1つしかなく，1日に行われるさまざまな番組の進行を，昼と夕方で交代しながらではあるが1人で担当するという，今では考えられないすさまじい現場だったようだ。

『川太郎』の企画の成立経緯について辻氏は把握していなかったが，おそらく，民放と違ってCMのないNHKが，番組のあいまにはさむ“箸休め”的な番組を労力をかけずに作りたいと考え，新聞に掲載されていた『川太郎』に着目したのではないかということだった。

一方，放送制作現場については，当時の様子を鮮明に記憶していた。原作者の清水崑からできたばかりの原稿がバイクでスタジオに届くと，まず4枚の原稿それぞれを厚紙にホチキスで留め，逆の順番に重ねる。厚紙の上部には3つ穴が開いており，これをフックにかけて逆さにセットし，1枚1枚めくって下に落とす，という役割を制作担当は負っていた。その様子をカメラが正面から映せば，1枚目から順番にコマが展開する仕組みである。

ただ，担当者によっては，順番を並べ間違えたり，イタズラ書きをしていた厚紙の裏側を映してしまったりする人もいたようで，その反省から，机の後ろに制作進行が立ち，4枚の原稿を順番に重ねて自分のおなかにもたれかけさせ，1枚目から順番に前へ倒すようにめくる方式に変えたという（右上写真参照）。

幼少時には紙芝居屋に憧れていたという辻氏は，めくり方にこだわり，切れのいいオチのときには素早くめくり，考えさせるようなオチのときにはゆっくりめくるなど，内容によってタイミングや速度を変えたこともあったという。

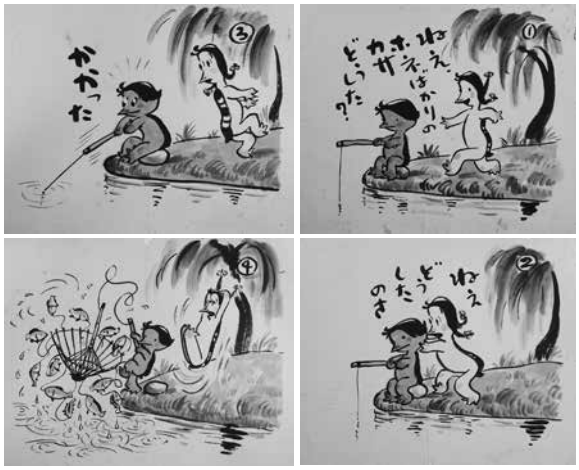
音声については，フロアで制作進行をしていた辻氏は記憶がないとのことだが，音楽を

めくりを実演する辻真先氏

芥川也寸志（やすし）が担当していたことを，当時の新聞記事が伝えている[7]。河童のイメージを作り出すために，東京放送管弦楽団のオーケストラと，藤原歌劇団の合唱を別々に録音し，さらに録音盤の速度を変えるなど工夫を凝らしてミックスし，内容のトーンに合わせて何パターンかの曲が作り上げられたという。

“漫画”と“漫画映画”の間

1分間に4枚の漫画が入れ替わるテレビ漫画『川太郎』は，テレビがかつてそう揶揄（やゆ）されていたとおり，まさに“電気紙芝居”だったと言えるかもしれない。一方で，“アニメーション”が“漫画映画”と言われていた当時，時間の経過とともに画像と音声が展開していく『川太郎』は，視聴者からすれば，“紙芝居”というよりも，今で言うところの“動画”に近く，“漫画”と“漫画映画”のあわいに位置するようなものだったのではないかと想像する。『川太郎』は“アニメーション”を意識して企画されたわけではないだろうし，決して“アニメーション”とは



『かっぱ川太郎』の原画（長崎市 中の茶屋・清水崑展示館所蔵）

言えないのだが，原稿を見ると，少なくとも作者の清水崑は，ほぼ同じサイズの絵柄を構成することで，キャラクターの動きの変化に目が行くことを意図しているように思われる。“アニメーション”が静止画の集積により生み出されるものだとすれば，これは，きわめて枚数が限定されてはいるが，一種の“アニメーション的な効果”ととらえることができる。

テレビが生み出した“のようなもの”

こういった，“純粋なアニメーション”ではないが，視聴者に“アニメーションに近い”視聴体験をもたらした番組は『川太郎』以外にも存在する。『おかあさんといっしょ』の中の最初のぬいぐるみ人形劇として，1960年から6年半にわたって放送された『ブーフーウー』もその1つである。

『ブーフーウー』の導入部は，①司会のお姉さんがカバンの中から3体のブタの人形を取り出し，壁に取りつけられたゼンマイを巻いてボタンを押す，②3体のブタの人形がモゾモゾ動き始める，③ブタの人形たちが芝居を始める，という流れになっている。①のカットでは，石膏細工の人形を，②のカットでは指人形を，③のカットでは，人間が入った着ぐるみを映しているのだが，視聴者には「人形自身が動き出す」体験として受け止められ，「あのブタの人形はどういう仕掛けで動いているのか」という問い合わせが殺到したという。また，『ブーフーウー』の作者だった飯沢匡（ただす）はチェコの人形アニメに影響を受け，この導入部の演出を考えついたと語っている[8)]。『ブーフーウー』も“純粋なアニメーション”ではないが，制作側のねらいとしても，また当時の視聴者側の体験としても，限りなく“人形アニメーションに近いもの”だった。

限られた予算内での量産化という制約の中から，『川太郎』のような，静止画をめくるという「テレビ漫画」や，『ブーフーウー』のような，中に人間が入って人形を演じる「着ぐるみ人形劇」という，独自の形式をテレビは生み出した。いずれも“アニメーション”ではない，“アニメーションのようなもの”で，今から考えれば随分と素朴な仕掛けである。しかし，手間と暇をかけずに知恵を使って，ねらった効果を生み出し，当時の視聴者に心躍る体験をもたらしていた点において，“のようなもの”は，きわめて“テレビ的”だった。

制作期間1日のアニメーション？

新しいもの，それまでなかったものというのは，「～とはこういうもの」という硬直した思い込みからではなく，往々にして従来の言葉や価値観の枠組みに収まらない“すきま”から生まれてくるものだ。

1957年から日本テレビで2年にわたって，その日のニュースを漫画にして伝える『漫画ニュース』という3分ほどのミニ番組が，日曜を除く毎日放送された。『漫画ニュース』も映像が残っ

ておらず，これまでは静止画を構成していた番組だと思われてきたが，近年では一部にアニメーションを取り入れていたのではないかと言われている[9]。スタッフとして漫画家のやなせたかしや馬場のぼるなどが関わり，切り紙細工やペープサート[10]ふうな手法を使って簡易なアニメーションを作っていたようである。

その日にあったニュースをどのようにして当日のうちに漫画，もしくはアニメーションにして放送できていたのか，制作システムについては明らかではないが，一部とはいえアニメーションを取り入れていたのだとすれば，「アニメーションは制作に時間がかかる」という当時の観念を覆すに十分な試みだったと評価できるのではないだろうか。実際，『漫画ニュース』を毎晩見ていたというNHK教育局ディレクター（当時）の後藤田純生（すみお）は，『漫画ニュース』の簡易なアニメーションに触発され，のちに『みんなのうた』や『おかあさんといっしょ』などでアニメーションを手がけることになる[11]。

“テレビアニメ”という言葉で現在我々が想起するものに収まりきらない可能性が，かつては存在していたようである。「テレビとは何か」が問われている今，先人たちがこれまで試みてきたことを見直し，現在，当たり前だと思っていることを再検討することは，次の一歩を踏み出すうえで決して無駄ではないはずだ。

（たかはし こういちろう）

注：

1）1917年に制作された国内アニメーション作品は，下川凹天『芋川椋三　玄関番の巻』，北山清太郎『猿蟹合戦』，幸内純一『なまくら刀』の3本。うちフィルムが現存しているのは『なまくら刀』のみである。

2）厳密に言うと，日本初のテレビアニメーションは1958年に日本テレビで放送された『もぐらのアバンチュール』，また，日本初のシリーズアニメーションは1961年から4分の帯番組としてフジテレビで放送された『インスタント・ヒストリー』とされている。なお，NHK初制作のテレビアニメーションは1960年に放送された『新しい動画　3つのはなし』である。『放送研究と調査』（2017年6月）の「放送研究リポート」に詳しい。

3）一般社団法人日本動画協会（2018）『アニメ産業レポート2017』

4）放送開始後しばらく日曜の放送はなかったが，1954年11月より毎日放送されるようになった。また，1954年の大晦日には，10分間の特集が放送され，1955年の終戦10年目当日にも特集番組直前に放送されていた。しかし『川太郎』放送終了後，後継番組は放送されなかった。

5）作画演出は，国産初のカラー長編アニメーション『白蛇伝』を手がけた藪下泰司，脚本は『ブーフーウー』の原作者・飯沢匡が担当している。

6）現在はデジタルハリウッド大学名誉教授として後進の指導育成に当たっている。NHKでは，芸能局楽劇課で『のど自慢』やドラマ『バス通り裏』などの演出を担当。1961年に手塚治虫原作のドラマ『ふしぎな少年』を企画・演出する。1962年退職後，アニメシリーズ『鉄腕アトム』や『エイトマン』などの脚本に関わる。

7）1954年2月14日　読売新聞（夕刊）

8）飯沢匡（1977）『武器としての笑い』（岩波新書）P134

9）原口正宏（2013）「『もぐらのアバンチュール』日本最初のカラーTVアニメの“発見”」「WEBアニメスタイル」

10）紙人形劇のこと。

11）後藤田純生（1970）「テレビとアニメーション」『小型映画　High Technic Series 5　アニメと特撮』P40（玄光社）

参考文献：

・山口康男編著（2004）『日本のアニメ全史』（テン・ブックス）
・津堅信之（2017）『新版　アニメーション学入門』（平凡社新書）
・津堅信之（2012）『テレビアニメ夜明け前』（ナカニシヤ出版）
・津堅信之（2007）『アニメ作家としての手塚治虫』（NTT出版）
・古田尚輝（2009）『鉄腕アトムの時代』（世界思想社）
・辻真先（1995）『テレビ疾風怒濤』（徳間書店）
・辻真先（2008）『ぼくたちのアニメ史』（フィルムアート社）
・辻真先（2013，2014）『僕らを育てたシナリオとミステリーのすごい人1，2』（アンド・ナウの会）